

王様研究会

2004/07/22

酒井俊典 (SAKAI, Shunsuke)

Perkins, D (2004) KING ARTHUR'S ROUND TABLE

7. COLLABORATION, NOT COBLABORATION

Coblaboration=コラボレーションの暗黒面(造語)

† Coblaboration の 3 側面

Cobrabortive な会話においては、何度と無く、3つの病的な会話のアーキタイプが発生することになる (1) Brownian motion (2) Downspiraling (3) Groupthink

(1) Brownian motion

別称: 「multi-headed animal syndrome」。テーブルを取り巻くたくさんの人々が、ともに考えるのではなく、異なる方向を向いて話すこと。

Cf. ブラウン運動

気体や液体中の微粒子の不規則な運動。周囲の熱運動をする分子の衝突が不均一なために起こる現象で、ブラウンが水中での花粉の運動から発見。のちにアインシュタインとランジュバンによって理論化された。

(2) Downspiraling

会話が、逃れることのできないブラックホールへ「行き詰まる」こと。

(3) Groupthink

安易な結論へ帰着すること

1. ファシリテーションは何をするのか。そして何故十分でないのか？

ファシリテーターの役割がしばしば期待されるが、良いことばかりではない。豊かな collaboration のためには、良いファシリテーション以上のモノが求められる。

・ 良いファシリテーターの役割 (David Straus)

process guide tool giver neutral third party process educator

上述した、Coblaboration の 3 つの病理的側面は、単に良いファシリテーションがかけているから発生する、というのではなく、更に取り組みねばならないより深い問題によるものである。

第 7 章では、この更に深い問題を徹底究明する

(1) the good (2) the bad (3) the ugly of collaboration

2. The Good : コラボレーションは何を意味し、どのように支援し、いつ支援するのか

Means: 真のコラボレーションは、人々が同じ結果に向かって、直接仕事や思考、責任を共有するやり方で共に努力をする時に起こる。

How: コラボレーションの「恩恵(more)」は、しばしば、人が単独で働く以上のことが情動で働くことで可能になる、ということにあるが、それ以外にも、いくつかの「恩恵」が認められる。「迅速さ」,「質の向上」,「実現可能性」,「グループの団結」,「学習」である。

When: コラボレーションが有効な選択肢であるかは、そのバックグラウンドの状況に依存する。「そのミッションそのものが必要とする場合」,「ミッションが良く定義されている場合」,「実質的なコラボレーションを要請するための良い支援があること」,「メンバーの集まり具合が良いこと」,「共同によるパフォーマンスに誠意や報酬が用意されていること」,「信頼の文化、雰囲気があること」である。

3. The Bad: 問題共有の落とし穴

・問題を共有することは、コラボレーションの核心である。しかし、通常は問題がつきものである。効果的なコラボレーションでは、望ましいやり方で問題の共有が成されている。それでは、私たちは、どのような方法で問題を共有しているのか？

誰もが行う問題共有方法の 4 タイプ

「Talk Through:語り尽くす」

「Entrust:任せる/ゆだねる」

「Divide up:分業する」

「Initial take:先陣を切る、主導権をとる」

・確かに、これらは魅力的な方法だが、グループが大きくなるにつれて、一人一人の人々の時間が無くなるので、多様な視点を確保しにくくなる。望ましい問題共有の方法は「which-hunt (?)」である。

・話し合うことを、単純に問題解決の方法として捉えることは危険である。弊害がある。他のアーキタイプが役に立つ場合もある。

† 「Talk Thorough」,「Entrust」,「Divide Up」,「Initial take」それぞれ問題共有のアーキタイプと問題のマッチングすること P 1 6 2 参照

円卓の舵取り役の人間は、上記の関係だけでなく、他の要因が与える影響を考慮することで、
+ 問題共有のバランスをとる

1. 集団が大きくなるほど、繊細な話し合いの機会は減り、ゆだねたり、分業することが多くなる。
2. ファシリテーションが効果的であるほど、大きなグループは問題を話し合うことによって、問題を共有することができる。
3. 完全に参加することが象徴的に重要であるほど、知識処理が妥当である限りにおいて、例え効果的でなくとも、話し合うことは重要になる。

4. The Ugly: Collaborative Citizenship への挑戦

- ・ 技術の問題と参加する人間の問題
- ・ 非常に高い確率で、人々はコラボレーションの良い市民ではない。協調的な努力を進める方法を見落とししたり、導き損ねたりする。
- ・ 円卓に（参加する人）には、責任感が必要である。
- ・ 一般的に、collaborative な市民のアーキタイプは4つ。「衝撃的」、「攻撃的」、「消極的」、「責任のある」アーキタイプである。前3者は知識処理や象徴的な行為としては、好ましくない。

5. The Art of Citizenship

・ Doyle と Straus によれば、いくつかの具体的な要因が、collaborative なコンテキストの中に、市民の責任を直接的に付与する。（P169 の 7 項目や P170 の Table1）

・ コラボレーションにおける真正の参加とは、ミッション、ゴール、進歩を所与のものとするのではなく、それらを構築、再構築し、モニタリングしながら参加することを示す。

- ・ 学習への参加が決定的に重要である。学習を周辺的なプロセスとして扱うのであれば、collaborative な citizenship は再び失墜する。

・ スピリットが全ての中で最も重要である。スピリットがあれば・・・。

6. Here there be Dragons

・ コラボレーションは、いつも苦難であるわけではない。しかし、真の「ドラゴン」は、（1）Gallop Democracy、（2）Lurking autocracy （3）feuds （4）spoilers にある。

・ しかし、「Dragon Situation」は手に負えないものではない。コラボレーションがタスクに適合していないとき、人々がこなすべきタスクに合わないとき、多くの場合、機能の分類がよくはたらく。それは前進するための方法であり、忘れられるべきではない。